

## ミャンマー僧院所伝のパーリ語古写本の現地調査 初期調査概要の報告と今後の展望

著者	笠松 直
雑誌名	論集
巻	40
発行年	2013-12-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00130324">http://hdl.handle.net/10097/00130324</a>

# ミャンマー僧院所伝のパリー語古写本の現地調査 —初期調査概要の報告と今後の展望—

笠松 直

## 1. 本調査開始の経緯

報告者は2008年以來、パリー文献協会(PTS)との共同プロジェクトに参加している。1994年に逢坂雄美(仙台高等専門学校名誉教授)と山崎守一(現中央学術研究所顧問)によって開始された、ジャイナ及びパリー聖典研究計画がそれである。多年に亘って継続されたが、研究体制と手法等の次世代継承を図って若手研究者と連携を開始したものである<sup>1</sup>。当該プロジェクトは、計算機の応用により速やかに多数の業績を挙げたが<sup>2</sup>、その所期の目的は作業の過程で得られた知見をPTSへ提供し、パリー文献群の(再)校訂に資すること<sup>3</sup>、語彙・詩脚索引を整備しパリー語辞書編纂等の基礎研究に寄与すること<sup>4</sup>にある。

NORMANが説明する如く、PTSの諸刊本は問題を多々含む<sup>5</sup>。校訂に際して十分な資料が得られず、或いは校正不十分のまま印刷されることもあった模様である。

<sup>1</sup> 2008年度—2010年度・科研費(基盤研究B)「パーソナルコンピュータによるサンユッタ・ニカーヤの語彙索引作成とテキストの再構築」課題番号20320013(代表者:逢坂雄美)は、報告者(笠松)及び河崎豊(現大谷大学助教)を連携研究者に含める。

<sup>2</sup> 情報学的な支援は逢坂及び宮尾正大(室蘭工大名誉教授)が担当した。韻律解析支援プログラム、詩脚ないし語彙索引作成プログラムの運用方法については、現在のところ以下の解説が最新版である:笠松直、西康友、逢坂雄美「中期インド・アーリヤ語聖典のパーソナルコンピュータによる自動解析 III—ジャバによる実行形式 Jar ファイル—」『中央学術研究所紀要』第41号、2012年、35—52頁。

<sup>3</sup> 上掲索引に係る成果としては山崎守一による以下の報告がある:「PTSテキストの陥穽:ヴィナヤの語彙索引作成を通して」『印仏研』45-1、1996年、pp.394—390;「PTS版テキストの限界—『ディーガ・ニカーヤ』を中心に」『仏教研究』第27号、1998年、pp.137—185;「PTS版テキストの再構築『ディーガ・ニカーヤ』を中心に」『印仏研』47-2、1999年、pp.837—833。

最近の成果としては: Edited by OLE HOLTEN PIND with an index prepared by Dr S. KASAMATSU and Professor Y. OUSAKA, *Kaccāyana and Kaccāyanavutti*. The Pali Text Society, Bristol 2013 (笠松・逢坂の担当箇所は227—326頁)。

<sup>4</sup> 以下PTSより発刊した索引類を列举する: M.YAMAZAKI, Y.OUSAKA, M.MIYAO *Indexes to the Dhammapada*. The Pali Text Society, Oxford 1995; Y.OUSAKA, M.YAMAZAKI, K.R.NORMAN *Index to the Vinaya-Piṭaka*. Oxford 1996; M.YAMAZAKI, Y.OUSAKA, K.R.NORMAN, M.CONE *Index to the Dīgha-Nikāya*. The Pali Text Society, Oxford 1997; M.YAMAZAKI and Y.OUSAKA *Index to the Jātaka*. The Pali Text Society, Oxford 2003; M.YAMAZAKI and Y.OUSAKA *Index to the Majjhima-Nikāya*. The Pali Text Society, Lancaster 2006. この他、中央学術研究所によるモノグラフシリーズ *Philologica Asiatica* に関連業績多数あり。

<sup>5</sup> 総論的には以下を参照: K.R.NORMAN 'The present state of Pāli studies, and future tasks' 『中央学術研究所紀要』第23号、pp.1-19, 1994 (= Collected Papers IV. The Pali Text Society, Oxford 1996, pp.68—87); 山崎守一訳「パリー研究の現状と今後の課題」『中央学術研究所紀要』第24号、pp.1—29, 1995年。

それ故、再刷の際に編集者が改正を試みた例が多々見られる。他方、再刷を繰り返す中で、何からの事情で diacritical marks ないし文字自体が消滅した例も見られる。こうした「読み」を無批判に受け取ることはできない。当然訂正せざるを得ないが、この際には本来、学問的な再校訂が行われなければならない。しかし索引は研究のための工具であって、速やかに斯界へ提供すべきものである。そこで PTS 側 (Rupert GETHIN 会長及び William PRUITT) と綿密な連絡の上、索引使用に支障をきたさないよう、最低限の訂正を施すこととした<sup>6</sup>。

当該プロジェクトは、現在進行中の Aṅguttara-Nikāya (AN) 計画を以て、主たる聖典の索引作成を終了する<sup>7</sup>。本作業中にも難点が多数発見され、抜本的な対策を施す必要が認められた。このような状況にある中、PRUITT より 2012 年 6 月頃、ミャンマーの僧院所蔵の古写本に対する調査の可能性が示唆された。蔵書群には AN の Tīkā 類を始め、多種多数の古写本が含まれるという。NORMAN が語る如く、パリー文献研究の将来の課題には、復註類や東南アジア諸地域で制作された諸資料へ研究の手を広げることも含まれる。当該調査により相当量の新規校訂本ないし再校訂本のための資料群が収集されるものと思われ、ここに共同プロジェクトは新局面を迎えるに至った。

## 2. 本調査の目的<sup>8</sup>

本調査の主たる目的は、南方 (上座部) 仏教に係る古写本群の写真撮影と情報収集にある。

現地の諸僧院には貴重な史資料が多数所蔵されており、各個に保存維持の努力がなされている<sup>9</sup>。しかし古貝葉写本の学術的重要性や文化財的価値は、現地では

<sup>6</sup> これらの「訂正」は、索引使用者のためにも公表すべきものと考えられる。SNI (2006 年版) 及び V (2008 年版) に対する誤植訂正表については以下の monograph を参照されたい: S.KASAMATSU, Y.KAWASAKI, M.YAMAZAKI and Y.OUSAKA *Toward a Critical Edition of Saṃyutta-Nikāya*. Chuo Academic Research Institute, Tokyo 2010.

最近刊行された Milindapañha 語彙索引の場合、初版と 1997 年再版とを参照しつつ、訂正表を巻頭に付した: S.KASAMATSU, Y.NISHI, Y.KAWASAKI and Y.OUSAKA, *Index to the Milindapañha*. The Pali Text Society, Bristol 2013.

<sup>7</sup> 2011 年度-2013 年度・科研費 (基盤研究 B) 「パーソナルコンピュータによるアングuttラ・ニカーヤの語彙索引作成とテキスト再構築」課題番号 23320014 (代表者: 逢坂雄美)。研究分担者に笠松を置く。

<sup>8</sup> 以下、本稿 2-4 節は報告者による別報「ミャンマー所伝南方仏教古写本調査報告」『印仏研』62-2, 2014 年, pp.848-842) を再構成し、補訂増補を施したものである。

<sup>9</sup> 清水が報告するタイの某寺院の場合、保存状態は極めて良好であるにせよ、約 100 年に亘って寺宝として秘蔵された由である (清水洋平・舟橋智哉「タイ王国ベップリー所在寺院ワット・ヤイ・スワンナーラムの経蔵調査」『印仏研』59 巻 1 号, 2010 年, p.363)。この場合は貴重な文献資料がその学術的価値

必ずしも必要十分な認知を得ていないものようである。保存状態と管理体制に問題を抱え<sup>10</sup>、湮滅・散逸の危機にあるものもある<sup>11</sup>。このような状況の下、現地関係者及び関連分野の海外研究者ないし研究機関は、貴重な文化遺産である仏教文献の保存・保護のため<sup>12</sup>、各地で連携して調査・資料収集、写真撮影、カタログ制作・デジタル化を進めている<sup>13</sup>。

本調査計画もこの一翼を担う。古写本を写真撮影して電子的に記録し、書写年代をはじめとする諸情報を採取し、カタログに纏め、報告する。特に注力すべきと判断したテキストについては、本文を可及的速やかにウェブないしモノグラフ等によって公表する<sup>14</sup>。

周知のごとく、PTS は誤記・誤植をはじめとする問題を抱えた校訂本の再校訂を長年の課題としてきた。本計画に於いても、1871 年の第 5 回結集<sup>15</sup>ないしラングーン (Rangoon, 又はヤンゴン) で行われた 1954-56 年の第 6 回結集以前に筆写された、ミャンマー現地の諸寺院・僧院図書室所蔵のパリー語仏教古写本を優先的に撮影する。なお図書室等には canon, atthakathā のみならず、文学・伝統文法学等の蔵外文献資料も豊富に見出される。復註類や東南アジア地域で著述された文学・伝統文法学等のパリー語文献の校訂出版・研究も視野に入れ、我々は僧院所蔵の文献の悉皆調査を行う。

---

を知られぬままに置かれることになる。

<sup>10</sup> 後述する Thar-lay 僧院の場合、写本群は本堂脇の鍵付き木製書棚の中に納められているのみで、これ以上の特段の防犯措置はとられていない。我々が訪問した際、鍵を紛失してしまっており、僧院は止むを得ず錠を付け替えた。また、書棚のすぐ隣には巡礼の信者への振舞いに用いる食器を収める食器棚があり、貴重書の保存管理体制としては難がある。

<sup>11</sup> 例えば、甚だしくは僧院から流出した貝葉写本が、観光地で土産物として小分けに販売されることもある。

後述 U Pho Thi 図書室保存会によれば、貸借して返却しない例も危惧される。本計画による電子的副本作成は彼らにとっても喜ばしいものの由。

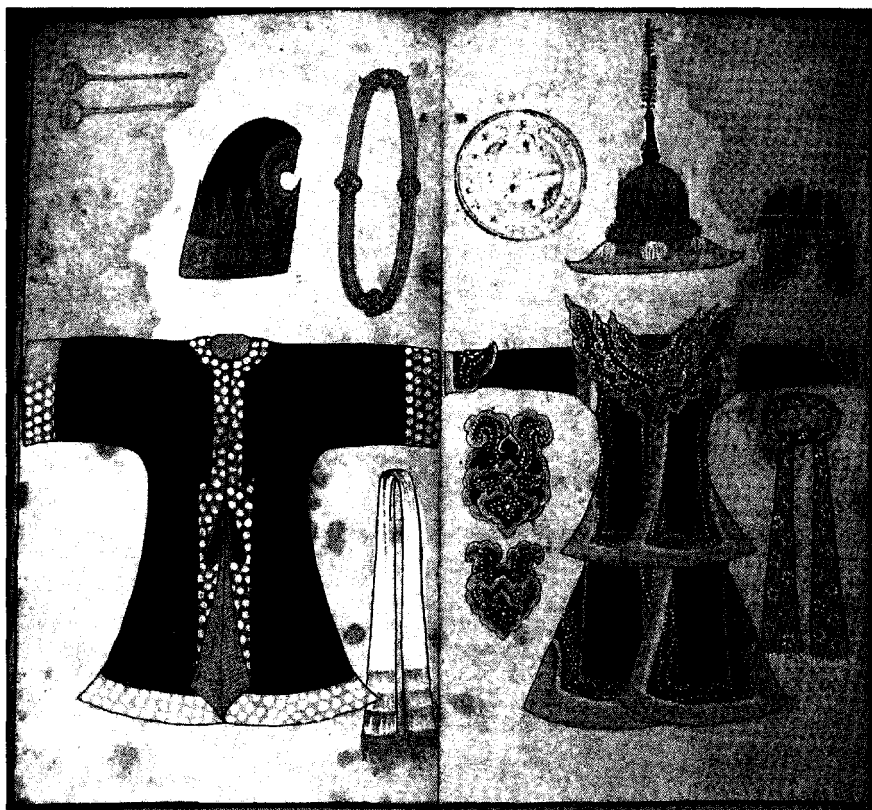
<sup>12</sup> 「重要なものを出版して現地の人々の伝統文化意識を高め、世界の研究者たちにも裨益する(清水洋平・舟橋智哉「Wat Ratchasitharam が所蔵する貝葉写本—Phra Pariyatti School 内の写本調査から—」『パリー語仏教文化学』第 23 巻, 2009 年, p.94)」ためでもある。

<sup>13</sup> Digital Library of Lao Manuscripts (<http://www.laomanuscripts.net/en/index>) 等。

<sup>14</sup> 本研究では、逢坂、宮尾及び藤原和彦(仙台商寺)による諸種の情報工学的支援を予定している。撮影した画像の数量は膨大であり、文献学研究の速やかな進展のため、処理の自動化は極めて重要である。例えば電子ブック自動生成プログラムは、画像群から研究に必要な情報のみを抽出でき、関連研究者の個々の要望に応じた、速やかで安価な情報提供を可能とする。

<sup>15</sup> コンバウン (Konbaung) 朝末期、ミンドン王 (Mindon, 在位 1853-78 年) によって新都マンドレー (Mandalay, 造営 1857 年) にて行われた結集。当時コンバウン朝は第一次 (1824-26 年) 及び第二次英緬戦争 (1852 年) の結果、ヤンゴン (Yangon) やタトン (Thaton) 等の下ビルマ海岸地方を喪い、版図は上ビルマに限定されていた。

我々は、図像学的な展開を期待し、絵画資料も収集する。僧院配置図や、諸尊格・天界・地獄界等を描く世界図には教学的興味があろうし、占星術資料や本草学の資料、諸種の装束・輿や鞍などの王の regalia を描いた図（下図、U Pho Thi 図書館蔵）には民俗学的・歴史学的価値等が認められる可能性があるだろう。



さらに本計画の写本情報収集業務等の諸事業を通じて現地図書室司書や情報工学者等の人材・技術育成、交流を促進し、図書館支援者や信者組織等の文化財保護への意識醸成を図り、文化遺産の自立的継承・保全を支援する。実作業を共同で行うことでささやかながら国際的友誼を深め、成果を広く報告することで東南アジア仏教文化及びミャンマー文化理解の深化に資すべく努めたい。

### 3. シャン州 Thar-lay 僧院

Thar-lay 僧院はミャンマー東部シャン (Shan) 州の風光明媚な観光地、インレー湖 (Inlay Lake) 中の Thar-lay 村にある<sup>16</sup>。壮麗な水上寺院ファウンドーウー・パゴダ (Phaung-daw-oo Pagoda)<sup>17</sup>から南東に、小島群を繋ぐ橋をいくつか辿り渡って徒歩数分の距離に位置する。インレー湖は乾季と雨期の水位の差が著しい (平均約 1.5m と言われる)。それ故、同僧院も周囲の住宅と同様の木造高床式である。本堂の床板は、所々空いて、床下の赤土が見える。雨期には床下まで湖水が浸入する由であり、乾季でも移動には小舟を用いるのが便利である<sup>18</sup>。

当該寺院については、既に 1997-98 年及び 2003 年にヤンゴンの Universities Historical Research Centre が組織的蔵書調査を行っている<sup>19</sup>。貝葉写本については、嘗ては 1000 束以上が存した可能性が示唆されるが、現在は 886 束を有する。数本の写本を纏めた束もあり、テキストのタイトル総数は 958 本に達する。第 5 回結集以前に遡る写本を多数含み、1800 年以前筆写のパリー写本に限っても 45 本を数える。このほか 26 本の *parabike* (アコーディオン式折本の紙) 写本を有する<sup>20</sup>。笠松, PRUITT, A.R.FALQUÉS は 2013 年 3 月 5-8 日に同僧院を訪問し、20 写本の写真撮影を行った。以下、特に興味があると思われる聖典類及びその注釈、仏伝類に限って、カタログ登録番号 (現地写本リスト番号)、テキスト名を、参考まで

<sup>16</sup> Thar-lay 村の成立はコンバウン朝のボードパーヤー王 (Bodawpaya, 在位 1782-1819 年) 治世初期、1789 年 6 月 26 日に置かれる。寺院の設立も同時期と考えられる由 (U THAW KAUNG, U NYUNT MAUNG and Associates, *Palm-leaf Manuscript Catalogue of Thar-lay (south) Monastery, Thar-lay Village, Inlay Lake, Shan State*, ix)。近隣には他にも多数の写本を蔵する僧院が存したが、火災によって失われたという。

<sup>17</sup> 本尊の 5 体 (のうち、現在では 4 体の) 仏像を、黄金色のカラウエイ (Karaweik) の船に乗せ、湖畔の村々を巡行する祭りである (例えば参照: 中村羊一郎「ミャンマー、インレー湖のパンドーウーの祭りと湖畔住民の民俗—王の巡幸と山の民、水の民の交流—」『静岡産業大学情報学部研究紀要』第 14 号, 2012 年)。

<sup>18</sup> 2013 年 3 月の訪問時には、僧院中庭は雨期を控えて耕されていた。この近辺の湖水は泥の色が濃く、冠水すると程よく土地を肥やす模様である。換言すれば、インレー湖には年々大量の土砂が流入しているのであって、将来的には環境対策も必要となるようである (この件、参照: 『ミャンマーを知るための 60 章』明石書店, 104f. [古市剛久担当])。僧院脇の小路では、小舟が水面下の泥丘に乗り上げて立ち往生する姿も見られた。

<sup>19</sup> その成果は公刊された (前掲注 16 参照)。この調査の際、重要と見做された 34 本の貝葉写本および 24 本の *parabike* の写真撮影を行い、マイクロフィルムに収めた由である (前掲書 xi)。但し当該フィルムの内容は現在不明とのこと。我々は後述 U Pho Thi 図書館所蔵本の調査を終えたのち、Thar-lay 僧院所蔵本の悉皆調査に取り組む予定である。

<sup>20</sup> 後述の Saddhammajotikā 僧院に見られるように、僧院図書館は教育・啓蒙、研究用に永く実用されたもののようである。従って損耗も相当数あったと想像される。Thar-lay 僧院の場合、一時写本群は、*“in a mixed up, disused, dusty condition”* といった状態にあったという (前掲書 xii)。U NYUNT MAUNG 率いる調査団は写本を個別にとりわけ、整序することから始めなければならなかった。

に写本書写年の西暦（ビルマ暦）を付して数例のみ摘記する：

- 36 (TL 108) *Jinālaṅkāra-ṭikā* 1757 (1119)  
 60 (TL 656) *Nemijātaka-atthakathā* 1676 (1038)  
 85 (TL 606) *Petavatthu-atthakathā* 1757 (1119)  
 146 (TL 587) *Therī Apadhān* 1749 (1111)  
 147 (TL 626) *Therīgāthā-atthakathā* 1780 (1142)  
 161 (TL 606) *Viṃānavatthu-atthakathā* 1777 (1139)

#### 4. モン州タトン, *Saddhammajotikā* 僧院<sup>21</sup>

ミャンマー南部に位置するモン（Mon）州タトンは、かつてのモン族のタトン王国首都所在地であり、ビルマ族の王国へのパーリ文献導入に重大な役割を果たした<sup>22</sup>。我々の調査地 *Saddhammajotikā* 僧院<sup>23</sup> 附属 U Pho Thi 図書館はここに所在する。

この図書館は 1929 年に創設されたと伝わる。1923 年に運用開始された仏僧資格試験に資すべく、現地の富裕な在家信者 U Pho Thi 氏とその妻 Daw Khin Khin Gyi 氏とが寄贈したものという。現在も周辺住民による奨学後援組織（1922 年設立）が有効に機能している。

図書「館」とはいうものの、現在では寄宿舎を主たる機能とする様子である。二階建ての建物は非常に重厚、堅牢なコンクリート造りと見え、四隅に沙弥のための僧坊を都合 8 室備える。地階は板張りの道場で占められるが、柱に渡した紐に洗濯物を干しているのをよく見かけた。学習は別棟の講堂で行われていた。早朝から沙弥や僧の朗詠の音が周囲に高く低く、蜜蜂の羽音のように響く。

図書室は二階の、僧坊を繋ぐ回廊を巡らした内側にある。ほぼ南北を縦軸とし

<sup>21</sup> 特に当地の計画については、PTS の web page 内の“Project to Digitize Myanmar Manuscripts”の頁 (<http://www.palitext.com/subpages/thaion.htm>) を参照されたい。

当該僧院については、本稿以前に執筆した報告では「調査地 β：某州 A 僧院」と仮名とした（前掲注 8 に挙げた別報を参照されたい）。現地奨学後援組織と PTS との申し合わせにより、調査完了まで匿名としたいとする意向を受けてのことだが、2014 年 1 月段階で上掲 web page で所在と僧院名が公開された。また、日本語での発表は差支えないとされたこともあり、本稿においては実名表記とする。

<sup>22</sup> モン族の王国は古くからインド・セイロンと交易を行い、早期から上座仏教を受容するなど、外来文化の受入口として機能していたという。上ビルマのアノーヤター王（Anawratha）はタトンを攻略（1057 年）、舍利、授戒僧、三蔵等をパガンに移入した。

<sup>23</sup> 近隣では最も高い Myathabate 山の山裾に位置する。900 段ほどの階段を上った先のこの山頂には Myathabate Pagoda が存する。僧院の設立時期は不明と聞く。

た、約 5.4 x 約 12.8m の部屋であり、東西と北に、鉄の内張りを施し、上下に落とし錠を備えた堅牢な木扉を備える。東西の扉は外に開き、北の扉は内側に開く。主たる入口は東の扉で、外側に二つの南京錠を備える。図書室内に入るには、僧院長の許可を受け、後援組織に接触して鍵を借り出す必要がある。



(U Pho Thi 図書室内部の写本厨子。2013 年 8 月笠松撮影)

天井は金箔に飾られ、これも金箔がなされた貝葉写本を納める 8 基の厨子を納める。厨子は二段からなる基壇をもち、本体は縦 1.8m、横 1.3m あり、ガラス窓



付の二重の観音扉を備え、五段の棚を設える。貝葉写本の保存状態は非常に良好であり、管理体制も十分と考えられる<sup>24</sup>。写本の多くには、伝統的な貝葉タグのほかに白い厚紙でできたタグが付されたものも多く、後述予備調査の後に番号順に整理されており、検索も容易である。

同図書室所蔵写本については、過去少なくとも2度のリストないしカタログ作成が行われた。写本には通例、2種の番号が与えられている。「旧番号」の整備がいつ・誰に為されたものかは不明とのことである。現在我々は、現地後援組織とともに、「新番号」に準拠して調査を進めている。これは788番まであり、1998年に行われた調査に基づく。ヤンゴンから図書館員等10人からなる調査団が来訪し、10日間作業して写本リストを作成したが、整理未了で中断した由である。

PRUITT, FALQUÉS, 河崎が2013年2月20-25日に第一回調査を行い、同8-9月に笠松(8月17-25日)、PRUITT(8月17-9月11日)、河崎(9月4-11日)が第二回調査を行った。両調査ともU NYUNT MAUNG<sup>25</sup>の同行と助言を得つつ、写本情報を採取し、写真撮影を行った。以下、その数例を摘記する：

No. 360 *Jinālaṅkāra nissaya* (*Guṇālaṅkāra Ther*)<sup>26</sup>

No. 365 *Jinālaṅkāra-ṭikā nissya*

No. 493 *Jinālaṅkāra* 及び *Ṭikā, Dīpaṇī*

No. 567 *Dhammapada* 及び *Aṭṭhakathā, Ṭikā*

No. 624 *Sagāthāvagga, Saṃyut-ṭikā Nidānavagga, Saṃyut-ṭikā*

No. 670 *Petavatthu Pāḷi, Aṭṭhakathā, Vimānavatthu Pāḷi, Aṭṭhakathā*

No. 637 *Āṅguttuir-ṭikā (Eka, Duka, Tika)*

## 5. 今後の調査・研究について—仏伝文学 *Jinālaṅkāra*

以上、これまでの調査の概要を報告した。報告者の研究グループの第一の課題は、各僧院蔵書の悉皆調査による資料収集であるが、この点は良好に進展してい

<sup>24</sup> 但し、図書室外壁沿いに設置された11架の木製書棚、各2本の木製乃至金属製キャビネットに納められた洋装出版本の虫害は大分進行している。稀観書が含まれている可能性もあり、調査するのが望ましい。2014年3月の調査では一部洋装本の調査を行った(FALQUÉSが担当)。

<sup>25</sup> 元ヤンゴン大学中央図書館司書。貝葉写本調査の領域で指導的な人物であり、本文中に言及したThar-lay僧院所蔵写本調査及びU Pho Thi図書室所蔵写本調査も手掛けた。

<sup>26</sup> *nissaya*(ないし *nissya*)とは、パーリ文献に対して現地語(この場合、ビルマ語ないしモン語)で一对一の語訳を施したものを言う。現地諸語の研究に有用な情報を含む可能性がある。

る。第二の課題は調査結果の公表に置く。我々は速やかに情報を斯界に提供するため、Saddhammajotikā 僧院蔵書に対する簡易な写本カタログを制作中である。また、情報工学的手法を援用した情報公開・提供手法の構築を試みている。

第三の課題は各個資料の研究にある。報告者は当初、主たる注意を *Petavatthu-atthakathā* (ないし *Vimānavatthu-atthakathā*) に向けたが、このほか特に *Jinālaṅkāra*<sup>27</sup> 及びその注釈文献に注目したい。これは約 250 偈からなる美文調の仏伝文学であって、著者は Buddhādatta と伝えられ、12 世紀の Buddhārakkhita による註が伝わる<sup>28</sup>。写本は多数伝えられる。Thar-lay 蔵書中にも、既に言及した 36 (TL108) *Jinālaṅkāra-ṭīkā* (書写年代 1757 年) を最古とする 5 束の写本が伝わる (内 1 本は nissaya)。U Pho Thi 図書館にも関連写本は 3 束あり、*Ṭīkā* 類も nissaya も伝わる。東南アジア諸地域で広く好まれ、重視されたもののようである。当該文献の紹介・検討は、東南アジア仏教理解に資するものと思われる。

## 参考文献

生野善應

『ビルマ上座部佛教史』山喜房仏書林, 1980 年

橘堂正弘

『スリランカのパーリ語文献』山喜房佛書林, 1997 年

MALALASEKERA

*Dictionary of Pāli Proper Names*. 1938 (repr. 1938)

中村羊一郎

「ミャンマー、インレ湖のバンドーウーの祭りと湖畔住民の民俗—王の巡幸と山の民、水の民の交流—」『静岡産業大学情報学部研究紀要』第 14 号, pp. 1—33, 2012 年

根本敬

『物語ビルマの歴史 —王朝時代から現代まで—』中公新書, 2014 年

<sup>27</sup> 校訂と訳は: GRAY, James. *Jinālaṅkāra or "Embellishments of Buddha" by Buddhārakkhita*. First published by Luzac & Co. 1894 (Reprinted by PTS 1981). その他、複数の東南アジア版が存する (例えば橘堂正弘『スリランカのパーリ語文献』26f. を参照されたい)。

<sup>28</sup> 著者問題については以下を参照: K.R.NORMAN *Pāli Literature*, p. 157.

NORMAN, K.R.

*Pāli Literature. Including the canonical Literature in Prakrit and Sanskrit of all the Hīnayāna schools of Buddhism.* Wiesbaden 1983.

‘The present state of Pāli studies, and future tasks’ 『中央学術研究所紀要』第 23 号, pp. 1–19, 1994 (= Collected Papers IV. Oxford. PTS 1996, pp.68-87)

(山崎守一訳) 「パーリ研究の現状と今後の課題」 『中央学術研究所紀要』第 24 号, pp. 1–29, 1995 年

清水洋平・舟橋智哉

「Wat Ratchasittharam が所蔵する貝葉写本—Phra Pariyatti School 内の写本調査から—」 『パーリ学仏教文化学』第 23 巻, pp.93–114, 2009 年  
「タイ王国ペップリー所在寺院ワット・ヤイ・スワンナーラームの経蔵調査」 『印度学佛教学研究』59 巻 1 号, pp. 359–364, 2010 年

田村克己・松田正彦編著

『ミャンマーを知るための 60 章』 明石書店, 2013 年

U THAW KAUNG, U NYUNT MAUNG and Associates

*Palm-leaf Manuscript Catalogue of Thar-lay (south) Monastery, Thar-lay Village, Inlay Lake, Shan State, Myanmar.* Yangon. Myanmar Book Centre 2006.

(仙台高等専門学校 准教授)

本研究は 2012 年度・KDDI 財団・調査研究助成（「ICT 支援南方仏教文化研究」と情報発信）、2013 年度・科研費（挑戦的萌芽研究）（「ミャンマーの南方仏教・パーリ語古写本と絵画資料の現地調査及び研究」課題番号 25580010）、平成 25 年度・三菱財団・人文科学研究助成（「ミャンマー所伝南方仏教史資料の国際協同現地調査」）による成果の一部である。

# An Early Report on the Digitizing Project for Old Manuscripts in Myanmar

Sunao KASAMATSU

In these years our team is involved in a joint research project that is aimed at the indexing, (re-)editing of Pāli Texts. Added to these points, as NORMAN stated, we should expand our field into the Pāli texts composed in South-East Asia. There are also a lot of manuscripts written before the fifth or sixth Buddhist councils in these areas. A considerable number of studies have been made in Laos and Thailand. Then our team shall carry out research on manuscripts preserved in the monasteries in Myanmar (Burma). Here I summarize the main goal of the research: conserving and cataloguing manuscripts on palm-leaves and *parabikes*; digitizing manuscripts of Pāli texts and illustrated manuscripts; providing support for the conservation of cultural and historical heritage in Myanmar as well as for the development of Myanmar society.

We made some exploratory trips to the Thar-lay monastery in Shan state and Saddhammajotikā monastery in Mon state. The U Pho Thi library of Saddhammajotikā monastery is very promising. The library has handed down a large quantity of old palm-leaves as well as beautiful *parabikes*, rare books. Our team focuses on the library.

We have already photographed numerous manuscripts, e.g. No. 360 *Jinālaṅkāra nissaya* (*Guṇālaṅkāra Ther*), No. 365 *Jinālaṅkāra-ṭīkā nisya*, No. 493 *Jinālaṅkāra* and its *Ṭīkā*, *Dīpanī*. It seems that this text was read with pleasure all over the SE Asia. Introducing this text will be useful for an understanding of the Buddhism in this region.